次世代リーダーの誕生

（農）和郷園 代表 木内博一（第5話）

資源循環への取り組み

「後継者不足」や「農業人口の減少」とは関係なく、新しい経営感覚で農業ビジネスの確立を目指す若き経営者たちが確実に育ちつつある。次世代の農業をリードする彼らが就業当時に何を思い、どう経営観を確立していったかを、数回の連載の中で語っていく。



【木内博一氏プロフィール】
1967年千葉県生まれ。
農水省農業者大学校卒業後、就農。現在、農事組合法人和郷園 代表理事、有限会社和郷 代表取締役。家族は祖母、両親、妻、娘。趣味は読書。

【和郷園プロフィール】
千葉県北東部の11市町村にまたがる、20代～30代の農業経営者たちによる産直団体。集荷およびパッケージセンター、冷凍野菜工場、堆肥製造プラントを備えている。売り上げは約18億円。

約90戸の若い農家からなる和郷園。1996年の設立以来、野菜や花など40品目を生産し、生協、スーパー、外食・加工業者約50社に供給している。農薬や化学肥料を必要最小限で抑えるため使用管理も徹底しておこなってきた。一方で、自然環境への負荷をできるだけ減らすための資源循環にも積極的に取り組んできた。

和郷園には多くの人が視察に来るが、必ず案内するのがリサイクルセンターだ。自然循環型農業の中核を担っている。いい堆肥・肥料が欲しい、そして未利用資源の有効活用しようという二つの目的で建てた。

きっかけはコスト削減グループの力を生かす

センターは徐々に施設を足していったが、最初に作ったのはBMW※のプラントだ。きっかけは肥料代の削減を考えてのことだった。作物の苗が発芽した頃に補う微量ミネラルは重要な役割を果たすが、購入すると高い。このコストを抑えたいと思っていた頃、BMWのことを知り、導入している産地を視察した。いろいろ回って「これは微量ミネラルの製造プラントとして使える」と思い1994年に導入。

次いで、「堆肥も作ろう」と醗酵槽を作った。原料はメンバーの畜産農家から受け入れることにした。

篤農家と言われる人たちは皆マメで、土と作物をよく見ている。だから必要な手を加えられる。堆肥作り、肥料作りなどの準備も怠らない。

一方、我々の本業は野菜作りだ。篤農家が土作りとしてやっている部分を協業でやろうというのがリサイクルセンターの基本的な考え。土作りは一人でやるより何人か集まったほうがコストも減らせる。

BMWにはいろんな方法があるが、我々は仕上がった堆肥を水と岩石が入ったBMWのプラントに入れる。岩石が持つミネラルが有機質に吸着し、良質のミネラル肥料になる。液肥はメンバーには無料で提供している。

取引先の残さ受け入れ相手と対等な関係築く

プラントが稼動するようになり、センターを管理する人を確保しようということになった。リサイクルセンターは他にもあるが、設備したその後、管理する人のコストを確保できないところに問題がある。なぜなら、確保しようとすれば、その分を堆肥の値段に上乗せしなければいけない。そうなると農家は買いづらくなる。

そこで、「質がよく、かつ安い堆肥ができないか」と考え、未利用資源の有効活用とドッキングしたらどうかという発想に行き着いた。

１９９８年にパッケージセンターを作り、生協など取引先のパッキングのアウトソーシングを請け負うようになったが、どうしても野菜の残さが出る。「畑に捨てればいいじゃないか」というのは農家の発想。和郷園の社会的立場からすると許されない。パックした野菜を売ってお金をもらっている以上、残さの処理もいい加減なことはできない。

これを資源として活用できないだろうか。しかも我々にはリサイクルセンターがある。運搬費がかかるなら、パッケージセンターでの運営費に組み込めばいい。一方、資源を堆肥にして農家に売れば収益が上がる。それでセンターの人件費をまかなえばいい。

他に同じような例がなかったので、仕組みを作るまで試行錯誤が続いた。その過程で、我々の取引先にもこのシステムに加わってもらい、より広範囲での資源循環を図っていくことになった。

２００１年食品リサイクル法が施行され、食品関連企業が排出する廃棄物の再生利用が義務づけられた。そこで、加工工場などに毎日野菜を届けるトラックの帰り便を使って、残さを回収するようになった。

現在、リサイクルセンターに持ち込まれる野菜残さは日量10ｔ。残さは破砕・脱水し、固形分は発酵させて堆肥にし、水分は発酵促進剤として牛糞堆肥の醗酵槽に散布。農家には大量にできる牛糞堆肥を主に出荷するが、依頼があれば野菜堆肥とミックスさせ、さらに1カ月完熟させて出荷する。畑に出向いて散布作業も請け負っている。

我々の取引先には、加工食品を作ってスーパーやコンビニに納めるベンダーもある。彼らにとって「リサイクルもしっかりやっている」ということは、スーパーへの営業の強みになる。

もちろん、センターを運営する和郷園にもメリットがある。回収先が増えたことで原料が安定して入って来る。食品残さの再利用の最大の課題は、作った堆肥がなかなか売れないことだが、我々には良質の堆肥を作るノウハウも、使い切る農家もいる。

さらにもう一つ。農産物の取引は基本的に買い手市場だ。しかしリサイクルの関係を作ることで、買い手から極端な値下げを要求された時も、対等な立場で話し合いができる。

事業は、自分にも相手にもメリットがなければ続かない。自分たちの要求を一方的に押し付けたり、相手の無理な要求をのんだりするのは、いわば〝暴力〟だ。

今日まで、和郷園がなぜ発展してきたかと言えば、〝暴力〟で要求せず、〝暴力〟を受けてもこなかったからだと思う。取引先との間に〝もたれあい〟や〝馴れ合い〟の関係を持ち込むことなく、農産物の品質を追求してきたし、知恵と創意工夫を出してさまざまな提案を取引先にしてきた。



リサイクルセンター内のＢＭＷ装置（上）とその内部（下）。微生物と岩石などを使い、「生理活性水」を作っている。この水は組合員が肥料として使う。

産学共同の研究に発展 海外での活用も視野に

今年から、リサイクルセンターは新しい事業に乗り出すことになった。これまでは専ら堆肥化してきたが、堆肥化がベストなのかどうか、もっと別の活用法もあるのではないかということを研究することにした。

取り組むテーマは「バイオ・リファイナリー」。未利用資源からエネルギーや高付加価値化学製品を作り出そうというものだ。国の事業にも採用され、今年から3年かけて研究する。初年度は2億円投入して日本最新鋭のプラントを建て、企業や学識経験者、国の研究機関も参加することになっている。

当面はバイオガス化、メタンガス化の研究をすすめ、堆肥プラントを動かすエネルギーとして使う。また、その過程で排出される廃液を、上質な有機肥料にしようという計画もある。この肥料は我々が使うだけではなく、有機質資源が足りない海外に持って行けないかというアイデアもある。

海外に関しては、2年前から中国の農業に目を向けてきた。近い将来、アジアにＥＵのような経済圏ができるのは確実だろう。その時代の先には、「日本で作るべき農産物」「海外で作るべき農産物」という棲み分けもされるようになる。そういった〝アジア版ＥＵ〟の中で、将来の自分たちの農業をどう組み立てるかという時代に入ってきた。（文・青山浩子）

※バクテリア（Bacteria：土壌菌群）、ミネラル（Mineral：鉱物）、水（Water）という自然浄化作用のある物質を組み合わせ、循環型農業や自然環境浄化に活用する技術。